

目 次

はじめに ひびきをつなぐ	
カリタスジャパン責任司教 菊地功	2
この冊子の使い方	5
四旬節第1主日に	6
「一緒に悩み、解決していこうね」 保育現場に浮かび上がる家庭の姿	
四旬節第2主日に	12
苦しみからほほ笑みへ 認知症のお年寄りと生きる	
四旬節第3主日に	18
「選び」の大切さに気づく 燃え尽き症候群の教訓	
四旬節第4主日に	24
「誰が来てもいいんだよ」 教会の窓口で働いて	
四旬節第5主日に	30
路上死ゼロを目指して 人と人のつながりがホーム	
受難の主日に	36
私たちを忘れないで 難民生み出す国家のエゴ	
あとがき ひびきをつなぐとき	42
注記	43
お知らせ 社会系各委員会発行物のご案内	44
2008年四旬節キャンペーン資料の問い合わせ先一覧	46

ひびきをつなぐ

カリタスジャパン責任司教 菊地 功

信仰の原点を見つめ直す。四旬節は、そのために最も適した「時」です。何を信じているのか、なぜ信じているのか。それを自分に問い直す「時」が四旬節です。毎年主のご復活の前に与えられるこの「時」は、同時にその信仰をどう生きているのかを、私たちに問いかけます。「行いが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだもの（ヤコブ2・17）」だからです。教会の伝統は、四旬節に祈りと節制と愛の業という三点をもって、信仰を見つめ直すように勧めてきました。

毎年の四旬節にあたり日本の教会は、祈りを深め愛の業への意識を高めるために、四旬節キャンペーンの小冊子をカリタスジャパンを通じて発行しています。10年前、1997年に『叫び』シリーズが始まりました。『叫び』シリーズは、社会の中にあって弱い立場に追いやられた人びと、苦しみと困難の真^{ただなか}直中にある人びとの心からの「叫び」に耳を傾けることを目指しました。そして2003年から昨年まで、その姿勢は『ひびき』というシリーズに継続されました。社会の現実の中で苦しむ人びとの叫びを聞くとき、その叫びに同伴する人びとの中にも、私たちに語りかけてくるものがあります。その叫びからのひびきを聴くことを心がけてきました。

しかしながら、時には私たちがそのひびきを受けとめきれず、むなしくひびいただけに終わっていた面があるかもしれせん。社会のひずみから聞こえてくる叫びを単なるひびきに終わらせないために、私たちはさらに一歩すすんで、そのひびきをつなぐことが必要ではないかと考えました。ひびきをつなぐとき、私たちの中に神の国が生まれてくるかもしれせん。そこで『叫び』から『ひびき』へと歩みを進めた四旬節キャンペーンの小冊子は、今年から『つなぐ』へとさらに歩みを進めることになりました。

『つなぐ』の編集にあたったメンバーの信仰のふり返りは、マタイ福音書25章31節から46節に基づいて始まりました。マタイ福音書のこの話を読んでみましょう。飢えている人や渴いている人など、小さい人びとの世話をした人は、世の終わりに天国に招かれます。逆に、小さい人びとに何もしなかった人びとは永遠の罰を受けることになります。小さい人びとの世話をした人は、社会の叫びを単なるひびきで終わらせず、彼らの苦しみにつながっていたのでしょうか。苦しむ人びとにつながっていくことは、知らず知らずのうちに、主イエスにつながることになりました。イエス自身が「わたしの兄弟であるこの最も小さい者にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」（マタイ25・40）と述べておられるからです。小さい人びとにつながることは、主イエスにつながり、さらに天の国につながっていくことになります。しかし現実には、そのつながりを拒絶するような行動も見受けられます。

「ホームレスは公園で寝ているだけで世の中の役に立っていない。イエス、ネコと同じで死んでもいい。ホームレスはゴミだ」。

2007年5月に、公園で寝ていた男性を襲撃した少年たちの言葉だそうです。悲しい言葉ではありませんか。世の中の役に立っていない「いのち」は、存在する価値がない。世の中の役に立っていない「いのち」は、「ゴミ」だから「掃除」しなければならない。恐ろしいまでにはっきりとした価値判断です。

そしてこの『いのち』への価値観は、突然変異で発生したもので、少年たちが作り上げたものでもありません。それは私たち自身が作り上げているこの社会に、厳然として存在する価値観に違いありません。だからこそ、大人へと育っていく過程で少年たちがそれを身につけたのです。他者のいのちを否定する価値観は、人と人とのつながりを断ち、ひいては自分と創造主である神とのつながりを断ち切ってしまう。人と人とのつながりを通じて、神につながっているという意識を持つことが、いのちの尊さを感謝のうちに感じながら生きる価値観を生み出すのではないのでしょうか。私たちは、信仰をひとりだけで生きているわけではありません。私たちの信仰は共同体の交わりに生きる信仰、まさしく

「つなぐ」ことによって成り立つ信仰です。このつながりを、教会における祈りのうちに強め、そして教会の外へと行いをもって広げていきましょう。

四句節にあたり、信仰の原点に立ち帰るとき、主イエスの慈しみのまなざしに思いを馳せたいと思います。私たちもその慈しみのまなざしに倣い、^は苦しみや困難の中にある人びとの叫びに耳を傾け、叫びを受け止め歩みを共にする人びとからのひびきを身体に感じ、その思いをつなぎながら、共に生きる共同体に育っていきたいと思います。

マタイ25章31節—46節

「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、羊を右に、山羊を左に置く。そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物差し上げ、のどが渴いておられるのを見て飲み物を差し上げたのでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたのでしょうか。いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたのでしょうか。』そこで、王は答える。『はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』

それから、王は左側にいる人たちにも言う。『呪われた者ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせず、のどが渴いたときに飲ませず、旅をしていたときに宿を貸さず、裸のときに着せず、病気のとき、牢にいたときに、訪ねてくれなかったからだ。』すると、彼らも答える。『主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えたり、渴いたり、旅をしたり、裸であったり、病気であったり、牢におられたりするのを見て、お世話をしなかったのでしょうか。』そこで、王は答える。『はっきり言っておく。この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである。』こうして、この者どもは永遠の罰を受け、正しい人たちは永遠の命にあずかるのである。』（日本聖書協会・『聖書 新共同訳』より引用）

この冊子の使い方 — 体験レポートをさらに深めるために

この冊子は、掲載されている体験レポートをさらに深めることができるように編集されています。もちろん、どの記事からどのように読んでいただいてもかまいませんが、編集の趣旨を生かした読み方をされるようにお勧めいたします。

四旬節の6週間に合わせて、6つの体験レポートがあります。四旬節の典礼に合わせ、1週間に1つのレポートを読みます。つまり四旬節第1主日に、最初のレポートを読み、受難の主日に6番目のレポートを読むこととなります。

読んだあと、何が心にひびいたのか、何に気づいたのかを丁寧にふり返ります。ふり返りのための3つの問いかけがありますので、役立つようなら、それに沿ってふり返ってみてください。

さらに、その主日に朗読された福音をもう一度読み直し、黙想してみましょう。それぞれのレポートで描かれた現実の体験に基づくならば、みことばから新たな意味をくみ取ることができるかもしれません。

そのようなふり返りの作業を通して、自分自身のつながりを見直します。私たちは誰とどのようにつながっていくのか。つながっていくとき、何を大切にするのか。そのような気づきから、私たちの生き方が変えられていくはずです。

グループで使う場合、ふり返りのヒントを使って、感想や思いを分かち合ってみましょう。また、みことばを皆で黙想してみるのもよいでしょう。

この冊子が活用され、意義深い四旬節を過ごすことができますように。

「一緒に悩み、解決していこうね」

保育現場に浮かび上がる家庭の姿

保育園が変わった

外山美子^{とやまよしこ}さん（仮名）55歳。保育園で働いて20年になる。働き始めた頃は子どもに何をし^{こんにち}てあげようかと考えていればよかったが、今日保育の仕事もだいぶ変わった。話が聞けずに突然外に飛び出していく子や奇声をあげる子が目につくようになった。保育は工夫をしなければできない。

父母、親族のトラブルが子どもに与える影響も出ている。夫の暴力から辛うじて逃げ、トラウマに苦しみながら子育てと生活の自立を図る母親もいる。だから前ぶれもなく父親が迎えにきて、うかつに子どもを渡すことはできないし、警察だという電話があっても、まず疑ってかか^らなければならぬ。おままごと遊びも、最近は父親や母親になりたがらない子も多く、「おうちごっこ」は「保育園ごっこ」に替わった。

自分の子どもを十分に見てくれないとって保育士に食ってかかる保護者もいる。自分は子どもを抱かないが、保育士はプロなのだから、きちんと対応して、泣いたら抱いてくださいと要求する。子どもがけがでもしたら大変なことになると保育士は戦々恐々としている。

保育以前に、家庭が維持できるのか、安心な場所になりうるかが問われる現代社会の中で、子どもも保護者も、職員さえもが疲れきっている。

子どもを放り投げるように置いていく母親

外山さんが最近気になっている母親の一人であるAさんの子は、ささいなことで周囲の子にかみつ^き、突き飛ばしけがをさせる。普通は2歳

になれば欲しい物を見て「チョウダイ」と言うのに、3歳を過ぎても「チョウダイ」が出てこない。「これをゴミ箱に捨ててきて」という保育士の言葉も理解できていないように見える。Aさんは保育士にあいさつもせず、子どもをクラスに放り投げるように置いて、逃げるように仕事に出かけていく。勤務時間を長くし、子どもと接したくないのではないかと思えた。朝御飯も食べさせてこないために給食をがつつと食べることもあった。「虐待だ。子どもが可哀想だ。子どもをもっと大切にするように母親に教えた方が良い」という話が数人の職員から出た。

外山さんは、子どもに軽度の発達障害があり、感情のコントロールが難しく、生活しにくいところがあるのではないかと疑っていた。それをどのように母親に伝えようかと悩んでいた。しかし、子どものことを話し合う前に、Aさんがいつも目を伏せ、周囲を拒絶していることや父親の姿が見えないことが気になった。外山さんが気になる理由は、実は自分自身の経験にあった。

マンションという鳥かご

外山さんは、片田舎で生まれた。カトリック系の短大卒業後、地元で8年間幼稚園教諭をし、伯母の紹介で一流会社に勤める男性と結婚、田舎を出て都会の新築のマンションに入居。すぐに男の子を授かり、無事出産。すべてが順風満帆と思われた。

ところが、子育ては簡単ではなかった。子どもは夕方になると必ず泣いた。なぜ泣くのか分からなかった。抱いてあやしてもますます激しく、そっくり返って1時間以上泣くわが子にイライラした。遠く離れた母や妹に電話で訴えても、「大丈夫よ。どこの子もそうなのだから」という答えが返ってくる。大丈夫ではなかった。「どうにかしてよ」、「ここから離れさせて」と叫びたかった。夫は朝早く出勤、夜は遅く帰宅すれば疲れきった様子で寝てしまい、休日には接待ゴルフ。家の事はすべて自分ひとりでやるしかなかった。ぎっくり腰になった時でさえ夫の助けはあきらめていた。新築マンションという鳥かごに一人で閉じ込められた不安と恐怖は幼い子どもに向かった。子どもに手を出そうとしてハッ

と手をひっこめたものの、どうしてよいか分からず、子どもをベッドに投げ捨てるようにたたきつけ、自分が泣き出してしまったこともある。

「大丈夫？ 橋から飛び降りそうな顔をしているわよ」と隣人に声をかけられたことがきっかけで近所との付き合いが始まった。マンションには同じように子育て中の専業主婦が多く、四六時中お茶だ、買い物だと誘われた。彼女らも孤立することにおびえていたのかもしれない。自分が知らない都会のことを教えてくれるし、子どものことも話せる相手として、初めはありがたかったが、いつの間にか、仲間はずれにされてはならないという恐怖から、具合が悪くても誘いを断れなくなっていった。

気楽に始めた保育のパート

あれほど時間を拘束された子育てだったが、子どもが小学校に入学してしまうと、ぼっかり時間が空いた。再び、一人ぼっちの時間が戻ってきた。周囲から見れば良い夫、新築の家、お金に困ることも無く、男の子も授かって、何の文句も無いはずなのに何かが足りなかった。

そんな時、近所の保育園でパートを探しているという話を耳にした。気楽に始めた保育のパートだったが、数年すると中堅職員として責任を持つ立場になった。熱のある子を家において出勤せざるをえない日もあった。夏休みは田舎に子どもを預けて働き続けた。子どもの声が聞きたくて田舎に電話をすると、里心がつくから電話をしてくるなど怒られた。何故こんな思いをしてまで働き続けなければならないのかと思うこともあったが、保育園の子どもたちや保護者からも必要とされているのだからと自分に言い聞かせ、むしろ仕事に没頭することで孤独感を忘れようとしていた。

夫の失業、息子の病氣

小さい頃は、自分が働きに行くというと熱を出し熱性けいれんを起こしていた子どもも、いつの間にか高校生になり、スポーツマンで成績は良く、有名大学に合格。苦勞して働いてきて、子どもによって報われる

日がそこまで来ているように思えた。

ところが突然、夫が失業した。働き口を探しに行く気配も無く毎日家の中でごろごろし、家計は不安なのに自分の兄弟と海外旅行に出かけた夫の姿に絶望した。この人は家族ではない。離婚という言葉が頭に浮かんだが、結局離婚せず、無言で夫を責めながら生活を続けた。

そんな時、息子が急に部屋から出てこなくなった。昼は寝て、夜中に起きている。その息子の友人から電話が入った。自殺の可能性がある、1年前からうつ病の薬を飲んでいるという。私のせいだ。夫との荒れた生活が子どもをこんなにしたのだ。うつ病は中枢神経の病気であり、心の病気ではないと書いた本も見したが、自分を責める気持ちはますます重くなっていった。夫に話したが、怠けているだけだと相手にもしてくれない。今や家族はバラバラ、こんな状態は誰にも話せない。こんなことが自分に起きるとは思ってもみなかった。

その後、数年かかって夫はパートで働き始め、息子も少しずつ外へ出るようになった。この経験は、誰でも人に言えない重荷があることを痛感させた。「だから、母親を責める前に、相手の重荷を感じる人でありたいと思うのです」と外山さんは言う。

苦しみ、悲しみを背負いつつ

Aさんの表情にかつての私と同じように誰にも言えない苦しみが見える。誰にも会いたくない、自分の事情を探られたくない、母親があんなだから子どもがおかしくなるなどと言われたくないのだろう。そう考えると、保育園に毎日連れてくるだけでも彼女は努力しているに違いない。

子どもを迎えに来た時の彼女の疲れた表情をみて「疲れているみたいね。大丈夫？子どものことは私たちに任せておいて」。口をついて、そんな言葉が自然に出た。彼女は何かを感じたのか、しばらく立ちすくんでいたが、「もう疲れちゃった」という言葉とともに涙をあふれさせた。

Aさんは親とうまくいかず、施設で育った。社会に出て、すぐに町で

知り合った男と結婚。しかし、夫は昼は眠り、夜は運送の仕事に出かけて家にはいない。彼女は生活のために夜スナックで働き続けた。寂しさに酒の勢いが加わり、夫以外の男性と関係を持ち、子どもが出来た。だから子どもは夫の子ではないという。夫は母子手帳の血液型でそれを知った。それから数年間、毎日のように酒を飲みながら彼女を責め、ささいなことで子どもを怒鳴る。けんかのたびに子どもは泣き叫んでいたが、最近ではそれさえもあきらめたように部屋の隅でじっとしているという。

「保育園で子どもが暴れて、先生たちは大変なんでしょう。先生たちの顔を見れば分かるよ。私が全部悪いというのも分かっているの。でも、どうしていいか私にも分からないんだよー」。外山さんは彼女の言葉を聞いて、その苦しみが痛いほど分かった。悲しいね、切ないよねと一緒に涙した。その時、互いの間に何か温かいものが流れ、何かが通じたという不思議な感覚を味わった。これからは子どものことを一緒に悩み、解決していける仲間になれたような気がした。

外山さんは最後にこう話した。「この仕事をしていなかったら、苦しむ人びとに出会わず、生き辛さを持っている人がいることも分からなかったでしょう。ひょっとすると、周囲の人と一緒にあって、あの親子さえいなかったらもっと楽なのにと、他人を批判だけする人間になっていたと思います。私の苦しみはこの時のためにいただいた恵みだったのかもしれません」。

* さらに深めるために *

自分のつながりをふり返る

- 1) 「一緒に悩み、解決していこうね」を読んでどこが心に一番ひびいたでしょうか。そのひびきをしばらく味わってみましょう。
- 2) あなたは今、どのような苦しみを抱えているでしょうか。その苦しみをどのように受けとめているでしょうか。
- 3) まわりに気になる人がいるでしょうか。その人につながっていくとき、大切だと思うことは何でしょうか。

主日の福音マタイ 4章1節-11節を味わうために

「イエスは荒れ野に行かれた」

イエスは宣教活動を始める前に、荒れ野で40日間過ごされます。この40日間にちなんで、四旬節は40日間になっています。イエスは人の直面する苦しみを、あらかじめ荒れ野で体験されたのかもしれませんが。

私たちの生活にも荒れ野の時があります。レポートの外山さんもAさんもそれぞれ荒れ野を過ごしてきました。各自の荒れ野が、それぞれイエスの40日間の荒れ野の体験に重なっていくのではないのでしょうか。そのつながりを意識しながら、荒れ野におられるイエスの姿に心を合わせてみましょう。

苦しみからほほ笑みへ

認知症のお年寄りと生きる

共倒れする患者の家族

ここは福岡県の豊津町の小高い丘の裾。白いマリア像の近くに車が止まり、そこからニコニコした顔のお年寄りたちが降り立つ。この認知症の人のデイ・サービスの受け入れの光景を、肩まで伸びた白髪に時折手をやりながら、ニコニコした眼差しで見守っている初老の男性は追立季治さん。この道に招かれたこと、そして、たくさんの仲間の支えがあることに感謝し、この方々を神が祝福してくださるようにと祈っています」と語る追立さんは、難病や認知症の人をもつ家族が、24時間絶え間なく見守る生活を余儀なくされ、挙げ句の果てに共倒れしていく様子に病の痛ましさを知り、5年ほど前にNPO法人（特定非営利活動法人）「いやしのさと」を立ち上げた。

この施設は現在、介護事業者の指定を受けて「認知症である要介護者に共同生活を営む住居で、介護その他の日常生活上必要な世話や機能訓練を行うサービス」を提供する、いわゆる「地域グループホーム」となっている。また、介護までは必要としない「要支援」の人をも受け入れることができるようにと、「介護予防」のための施設も併設する形をとっている。定員18人、通常は14、5人が暮らし、それと同数のヘルパー、そしてボランティア5、6人の所帯となっている。加えて、認知症の人びとにデイ・サービスを提供している。

仲間とともに支援活動

追立さんは、9年前に高齢者介護と子育て支援のボランティア団体の設立に参加した。そして、自分が生活する地域で多くの仲間を得て、そ

の活動を広げていった。教会活動で培った分かち合いの精神や、生活の見直しのセンスは、地域の活動に大いに役立った。また、30年以上も続けてきた教会の仲間たちとの家庭集会は、追立さんを支えるに十分な豊かな共同体に育っていた。

それらの経験を踏まえて、「主の促しを感じ、時のしるしを見て」追立さんは「いやしのさと」の設立を思い立ったのだった。自らが経営する会社の建物を、家族が工面してくれた資金で改造して施設とした。また、仲間が運営資金を持ち寄ってくれたそうだ。70歳を過ぎて、追立さんは教会共同体の豊かな支えをもらって、主の道具として働く恵みを得ることができたのだと言う。

混乱招いた制止・抑制

認知症の人が「いやしのさと」に入居して2、3日すると、落ち着きが見え始めるそうだ。そして、1週間ほどが経過すると、その人らしいリズムが現れて見守りが容易になると言う。そのころになると、家族が見舞いに来て、一緒に遊んで帰るようにもなるそうだ。それまで家族にとってやっかいな生活問題であった認知症のお年寄りの存在が、一変してほほ笑みに変わる光景を目にして「心は和みます」と追立さんの顔にもほほ笑みが浮かぶ。

「何もしとらんけん、何を話したらいいの」と言いながら、追立さんはこの笑顔を見るに至るまでの自分の苦しみや痛みをふり返っていた。開所して間もないころは、危険予防のために行動を制止したり意見したりして、かえって逆効果になって困り果てたこともあったそうだ。自らの排泄物を壁に塗りたくっているお年寄りを見つけて、あわてて飛んでいって、力づくでそれを止めさせようとしても、ただ混乱が増すばかりで、途方に暮れたこともあったとか。また、自分自身が被害妄想になってしまい、責め立てられているように感じて平静さを失い、自己の弁明に躍起になっていた時期もあったと言う。そのような時に、自分がどれほど無力であるかを思い知らされたと話す。そして苦し紛れに、「主よ、助けてください」と叫んでいたそうである。

主の望みに素直に従うと

「主に助けを求めるとき、映し出される過去の自分の姿に気づきます。『これまでずっと、わたしの望みに従わず、反抗し、言い訳してきたお前の姿が、正にそれではないか』という主の声が聞こえてきます。汚物にまみれてもがいているお年寄りの姿と自分とが重なって見えたとき、『わたしは、それでもお前を愛し続け、見捨てなかった』と主に言われて正気にかえるのです。そして、自分の姿を見て素直になった時には、直面していた問題は消え、不思議なことに願いはかなえられているのです」と、追立さんは体験をふり返って語っている。

認知症の人が追立さんの望みに従わず、反抗し、言い訳する姿の中に、追立さん自身の不従順が照らし出されていることを、主はお示しになり、そして魂を清めてくださるのだろう。「『あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい』との主の言葉によって、トマスが『わたしの主よ、わたしの神よ』と言って真の信仰を獲得したように、私も清い素直な自分に目覚めたいと願い、それがかなったのでしょうか」と語る追立さんは、その時に気づいた恵みを味わい直しているかのようだった。

認知症の人びとを介護する時に追立さんは、主がなさったように「愛し続け、見捨てない」態度で接するように心がけている。「主は私が無力なものであることを忍耐のうちに認め、私に主権を委ね、謙虚な姿で私にかかわってくださった」と言い、「そのような態度で認知症の方に接する時には、私はその方の『人間の尊厳』に仕えることができる」ときっぱり語る。

癒やしの業と人間の尊厳

私たちはみな、認知症が進行するに従って人間的価値がなくなってしまふように思い込み、見守りや介護に負担を感じてしまいがちである。そのような時にも、最も意義深い「無力化されたキリスト」の姿に出会えるようになると、そこには新しい価値観が輝き、私たちは癒やされ変えられるということなのだろう。追立さんは、キリストの姿にも、認知症のお年寄りの姿にも、そして不従順な自分の姿の中にも、共通して

「無力さ」を見出したときに、主の癒やしの業を体験したと言う。「人はそれぞれ、労苦を背負って生活しています。苦と楽は表裏、幸と不幸は表裏です。死と復活も表裏の関係です。もし神が喜ばれ、神の御心みこころをお慰めできるとすれば、苦を楽に、不幸を幸に、悪を善に、否定を肯定にと、価値観を変えた時ではないかと思うのです。主は受難と死を復活の栄光に転換された方です。私たちに感動を与え、目に涙を催もよおさせるのは、この栄光への転換のプロセスをどのようにたどったかに掛かっているのではないのでしょうか。そして、聖霊こそが、栄光へのプロセスを導く、いのちの友なのです」と熱い口調で語るのです。

皆が願いを祈りに託して

「いやしのさと」の白いマリア像の前には、そこで野外ミサができるようにテーブルが置かれている。そのテーブルを覆う透明なビニールの下に、紙片が何枚も挟まっていることに気づいた。「介護福祉士の資格試験に合格できますように」など、神社の絵馬を思わせる「願い札」である。いつの間にか、スタッフやボランティア、ときには入居者が、願い事を書いてここに挟んでおくようになったとのことであった。追立さんは、その願いの一つひとつについて、マリアさまの取り次ぎを願いながら祈っている。そして不思議なことに、これまでに祈願したことは、すべてかなえられているのだそうだ。毎朝マリア像の前で、ときにはマリア像を両手で抱きしめて祈っている追立さんの姿を見て、「いやしのさと」の皆が心を合わせて祈っているのだろう。「追立のじいちゃんが、祈ってくれとるけん、私も神さまの望みをかなえるためにがんばらにゃ、と思ってしまう」とスタッフの一人は、ほほ笑んでいる。

救いの福音を伝えたい

今日の社会の諸問題の根は、救いの福音がすべての人に十分に伝えられていないことにあると、追立さんは考えている。「今の社会は、神を必要としない原理によって築かれています。その中で、キリストに従おうとしている私自身も、もしかすると、神不在の死の文化の創設に力を

貸してはいないか、闇の世界の広がりに加担してはいないかと恐れるのです。神は、全人類の王であり、社会は神のものです。主は病人を癒やし、悪霊を追い出し、永遠のみ言葉で私たちを生かすお方です。現代人の多くが、この方による救いと癒やしを待ちわびているのに、彼らはこの方、キリストを知らない現実があります。社会が真理と愛に飢えているこの時に『誰が、彼らを主のもとにお連れするのか』『主に何を願い、何をしようとしているのか』と私自身が問われていました。そして私の心に、『主よ、私はあなたのものです。あなたの道具です。お使いください』という思いがわき上がってきたのでした」と、追立さんは宣教の使命を果たす自分の場を探し当てたときの心の動きを、このように語っていた。

キリシタンの「組」と同じ

この「いやしのさと」の取材をとおして、約400年前にこの九州の地にあった「サンタマリアの組」や「ミゼリコルディアの組」（注：43ページ）を思い起こすことができた。キリシタンたちは、追立さんたちと同じように、病気で苦しんでいる人びとの世話をし、救いの福音を伝えながら、豊かな共同体を営んでいた。そして毎日、聖母マリアに祈りを捧げていたのである。

今、教会の人たちがボランティアやスタッフとしてかわり、追立さんをかなめ要とする共同体として、認知症のお年寄りの世話をこの営みは、「いやしのさとの『組』」と呼ばれるにふさわしいと感じた。私たち一人ひとりも、共同体の中でともに生きながら、主の望まれる奉仕に導かれていると納得することができた。

* さらに深めるために *

自分のつながりをふり返る

- 1) 「苦しみからほほ笑みへ」を読んで、どこが心に一番ひびいたでしょうか。そのひびきをしばらく味わってみましょう。
- 2) あなたも誰かの世話（介護）をするときがあるかもしれません。そのとき、何を感じ、何に気づくでしょうか。自分の生き方や信仰を見直す点があるでしょうか。
- 3) 苦しんでいる人を思い出してみましょう。その人の中に、どのようなキリストの姿がイメージされるでしょうか。十字架に苦しむ無力なイエス？ あるいは、優しくほほ笑むイエスの姿でしょうか？ それとも？

主日の福音マタイ17章1節-9節を味わうために

「イエスの姿が彼らの目の前で変わった」

この個所はイエスの変容の場面です。十字架に向かう前に、イエスは神であることを弟子たちの心に刻んでおきたかったのでしょうか。弟子たちはイエスの姿が変わったのに、とても驚いたようです。

かわりのある人が変わっていくこともあると思います。レポートにあるように、周囲にとって訳の分からない行動をする認知症の人が、ほほ笑みを浮かべる優しい姿になることも。人が変わっていく姿に、イエスの変容を思い浮かべてみましょう。その人が自分で変わったのではなく、うちで働くイエスによって変えていただいたという思いで。

「選び」の大切さに気づく

燃え尽き症候群の教訓

自立に向けて就労の場

なにげない作業場の光景だが、いすに座って作業台に向かい、ここで衣料品にタグを取り付けている一人ひとは、苦しみの中から這い出して、懸命になって新しい歩みを踏み出そうとしている人たちである。この会社は、配偶者や恋人から、肉体的あるいは精神的暴力を受けて傷つき苦しんだ人びと、いわゆるドメスティック・バイオレンス（DV）の被害者たちに就労の機会を提供して、社会復帰を手伝っている。ここで働く堀江美帆さんに話を聞いた。堀江さんはこの会社の社員として働きながら、あわせてDV被害者の心が癒やされるように、ともに歩んでいる。

女性は、経済的自立がないと、DVの被害を受けていても、そこから逃れられないことが多々ある。支援活動だけではなく、経済的自立への道を開くことも必要であると、堀江さんたちは会社組織の形をとって活動し、就労の場を提供している。

見えない暴力、見えない出口

DVの実態は、なかなか把握することができない。閉鎖された空間の中で、本来は愛し合い支え合う関係にある夫婦や恋人、ときには親子の間に起きる恒常的な暴力は、被害者がその実態を第三者に打ち明けられない限り、外には見えてこないからである。また、自分がDVの被害者であると気づくことができないことも、とても多い。暴言や暴行などの肉体的・精神的暴力が続き、判断力さえ奪われてしまっていたり、どの家庭でも見えないところでは同じような暴力があるものだと思い込んだりし

てしまうからなのだろう。また、激しく非難されることによって、自分が悪いのだと思わされている場合もある。

たとえ、被害者が思い切ってその苦しみを打ち明けたとしても、日本の文化に潜む「がまんする」という美意識が、関係の改善を邪魔することが多い。誰も分かってくれないので、暴力を受けている状況から逃れることなど絶対にできないと、あきらめている人たちもいる。

思いもよらないところで、DVは起きている。近所の評判がとても良く、ボランティア活動などに積極的に参加し、青少年教育の活動でリーダーを務めている男性が、家庭では妻と娘に、性的暴力をふるっていたことが発覚し、誰もが信じられない現実が表に出たこともある。実際、たくさんの方がDVの被害に遭っている。既婚女性を対象とした総務省の調査では、「いのちの危険を感じるほどの暴行を受けた経験がある人」が4.6%、「性的な行為を強制された経験がある人」は何と17.7%にも及んでいる。

燃え尽きてしまった

この作業場に来ている人たちはそれぞれ、自分が受けた傷について、少しずつだが堀江さんに気持ちを打ち明けることができるようになった。それぞれの人が苦しみの中で叫びながらも、どこに出口があるのか分からずに、前にも後にも動くことができない状況が共通して存在していたことに、堀江さんは気づいた。そのことは、堀江さん自身が体験した苦しみと重なるものだった。

堀江さんは、東京の新宿駅の近くで野宿の生活を強いられている人びとを支援するグループ「スープの会」に加わっていた。やがてその活動は非営利活動をする民間組織NPO法人となり、生活保護を受給しながら社会生活に復帰したおじさんたちの「地域生活支援ホーム」として5つのグループホームを運営する活動へと発展していった。堀江さんは、あるグループホームの施設長になり、苦しんでいる人、困っている人の助けとなって働けることをうれしく思い、充実した時期を過ごしていた。

そんな中で、堀江さん自身、大きな問題に直面していたのだ。野宿の生活から立ち上がって、堀江さんが担当するグループホームで暮らすようになった一人のおじさんと、良い関係が作れなかったのだ。そればかりか、ときにはストーカー行為（しつこいつきまとい）にも遭っていた。「スープの会」は、その時に困っている人にみんなの手を差し伸べるといった活動が主体だった。その時期には、オーバーステイ（超過滞在）の外国籍の人たちの在留特別許可を求める運動にも取り組んでいた。親しい仲間たちはそれぞれが忙しく、なかなか相談を持ちかけることができなかった。また、自分自身のことなので、何とか自分の手で解決しなければならないと思いつめていた。

自分の苦しさを押し殺して働き続けていたある日、堀江さんは突然倒れ、体を動かすことができなくなってしまった。動くとき吐き気がしたり激しい頭痛が襲ってきたりして、働くどころではない状態である。医師から、燃え尽き症候群と診断された。

ドクターストップがかかって、グループホームの専従スタッフを降りなくてはならなくなった。堀江さんは、苦しみの中で叫びながらも、どのようにしてよいか分からずに、前にも後にも動くことができない状況にあったのだ。見えない暴力と見えない出口、これはDV被害者たちと同じだった。「幸いなことに、神さまが私の体を動けないようにして、医者にかかるきっかけを作り、私を救い出してくださったのだと思います」と、堀江さんはその出来事をふり返るのだ。

マルタの姉妹マリアの選び

「この夏に、マリアとマルタの二人の姉妹の場面（ルカ10・38-42）を黙想する機会がありました。『私はマルタだ』とつくづく思いました。そして主イエスからいただいた言葉を反復してみました。『マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ』。『選び』という言葉が響きました。マリアは自分が必要なものの中から良いものをただ一つだけ選んだのでした。私のように、何でも自分で引き受けてしま

って、それができなくなると、周りの人たちが手伝ってくれないからだと言って非難するのは、実に傲慢なことなのだと気づきました」。このように、堀江さんは自分の祈りと心境を顧みていた。堀江さんは、自分の限界を受け入れて、自分ができることの中から神の願いに沿うことをただ一つだけ選んで、それを誠実に行うことが主の望みだと理解するようになった。

「選び」ながら生活すること、神の望みを自分の望みと重ねて毎日を過ごすことは、なかなか難しいことである。堀江さんは「ただ一つだけ、良い方を選んだ」というみ言葉を心の中で繰り返して味わい、ていねいに「選び」を重ねていくと、少しずつ生活が整っていくことを感じたと言う。そして、苦しい「燃え尽き」の体験の後、6カ月間の休養を経て、必要なものの中から良い方を「選び」とり、今のDV被害者支援の仕事に就いた。

「選ぶ」ことができますように

DVの被害のただ中であって、苦しみの中で叫びながらも、どのようにしてよいか分からずに、進むことも退くこともできない状況に置かれた人たちが、たくさんいる。暴力によって、「選ぶ」力を奪い取られてしまっているからである。その人たちも「選ぶ」ことができるようになれば、見えない出口に光が差して、解放への道が開けるのではないかと堀江さんは期待している。

「自分が暴力を受けていることを『話す』ことを『選ぶ』のか、『話さない』ことを『選ぶ』のか。『自分の母親』に話すのか、『親友』に話すのか。性的な関係を含めてどの程度具体的に話すのか。一つひとつが『選ぶ』なのです。でも往々にしてどれを選んで良いのかが決められないのです。また、『選ぶ』違えると、再び袋小路に迷い入ってしまうこともあります。勇気を出して話した相手が、逆に自分を非難したりすれば、ますます孤立してしまうのです。そして、時間だけがどんどん経過して、ますます暴力から抜け出すことが難しくなってしまうのです」と堀江さんは「選び」の一つひとつが、とても大切なことだと強調する。

堀江さんは今、「選び」ながら生きる習慣を身につけたいと、心から願っている。「選び」を積み重ねていけば、再び燃え尽きてしまうことは決してないと、気づいているからだ。そして、「選び」のコツを少しでもつかむことができたなら、迷いの中で身動きがとれないでいる人たちに、そのコツを分かち合っていきたいと思っている。

そのコツの一つは、「多くのことに思い悩み、心を乱している」自分に気づき、「必要なことはただ一つだけである」という主の言葉に従って、その場面で一番ふさわしいものを祈りの中で「選び」とることだと、体験してたどり着いた確信を話してくれた。



* さらに深めるために *

自分のつながりをふり返る

- 1) 『『選び』の大切さに気づく』を読んで、一番心にひびいたのはどこですか。そのひびきをしばらく味わってみましょう。
- 2) 人とつながって生きるとき、巻き込まれてどうすればよいか分からなくなることがあるでしょうか。それはどのような感じでしょうか。
- 3) その中でも、自分が本当に大切にしたいことは何でしょうか。それを選んでいくため、妨げと助けは何でしょうか？

主日の福音ヨハネ 4章5節-42節を味わうために

「主よ、渴くことがないように、その水をください」

これは傷ついているサマリアの女がイエスとつながることによって解放されていく話です。この女性は5人の夫との結婚生活が破綻し、そのときは同棲中でした。6人の男性からDV被害を受け、苦しんだ可能性も十分考えられるでしょう。このような遍歴の中で、男性の都合に振りまわされた女性の悲哀のようなものを感じます。

イエスにつながっていくことで、彼女の心からいのちの水がわき上がり、徐々に解放されていきます。この女性の立場と苦しんでいる自分や苦しんでいる隣人を重ね合わせて、イエスの解放の道をよく味わってみましょう。

「誰が来てもいいんだよ」

教会の窓口で働いて

「誰が来てもいい場所なんだよと受け入れられたら、教会が生きた場所になる」と、小教区の事務局長を務めるAさん（男性、57歳）。この仕事に就いて15年になる。Aさんは、青年時代に小教区の一員として日本国内での難民受け入れの支援活動に参加し、その後もボランティアで教会を訪ねて来る人の世話をしてきた経験を持つ。その後サラリーマン生活を送っていた。15年前、当時の主任司祭の意向で小教区の事務所に常勤のスタッフを置きたいという職員募集の告知が出された。42歳だったAさんは会社を辞めて、教会の事務所で働くことを決めた。朝9時頃から夕方まで、毎日自宅から通っている。常勤のAさんの他には、非常勤の女性2人が交代で事務所の仕事をしている。

駆け込んでくる事情はさまざま

この仕事をしていると、教会を訪ねて来るさまざまな人に出会う。「キリスト教のことを知りたい」とか「洗礼を受けたいのだが」といった動機で訪れる人もあれば、難しい問題を抱えてカトリック教会だからと頼って来る人も多い。「リストカットするぞ」と脅かしてくる人、追いかけているという妄想を持って駆け込んで来る人もいる。こうした人との対応は特に大変だ。1980年代は、自分の身の上話をして結局は「お金をちょうだい」と生活の糧にするために教会を渡り歩く人が多かった。90年代に入って、路上生活者が助けを求めて相談に来るのに加えて、神経症・うつ・統合失調症など心の病を抱え、社会では受け入れられないが教会だったら何とかなるのでは、という感じで訪れる人が急激に増えてきた。ちょうど、日本国内で自殺者が急増して年間3万人

を越す事態になった時期と一致する。「こういった人たちにどう接するかが私の大きな仕事になってきている」とAさんは語る。

アルコール手放せず刑務所往復

アルコール依存症に陥り、仕事がダメになってアパートを追い出され、教会を頼って来た人とのかかわりを、Aさんは次のように話す。「AAのグループとかマックの施設（注：43ページ）を紹介するのですが、本人がそのプログラムをこなせない。そうこうしているうちにまた、生活のために万引きをするなどして逮捕される。できるだけ刑を軽くするために司法手続きのお手伝いをするが、刑期を終えて刑務所から出てくると、やがてまたアルコールを飲み始め、無銭飲食したとかで警察から電話がかかってきて、引き取りに行く…の繰り返し。でもまた教会にやって来るんです」。信頼してくれ、こちらを頼りにしてくれているが、力になれない無力感を感じるという。「でも、そこで切っちゃったら何のために教会があるのか、教会の意味が無くなるんじゃないでしょうか」。

精神疾患を抱えた青年信徒

「誰かが私を呪い殺そうとしている」といって教会にやって来た青年がいる。Aさんは、それまでの経験からすぐに「統合失調症の幻聴だな」と分かった。病院を紹介し、診察してもらってしばらく入院した後、投薬治療で症状が軽くなった。それをきっかけに教会に通うようになり、青年のグループに入った。一緒に聖書の勉強をしたり分かち合いをしたりして、その後本人が希望して洗礼を受けた。病気が完全に治ったわけではないので、調子の良い時とそうでない時があって時々大変なこともあるが、たまたま他にも教会で同じような境遇の、精神障害のあるグループの仲間との出会いがあったりして、それまで以上に足繁く教会に来るようになった。Aさんは、「出会いの中でその青年が『生きたい』と思うようになってくれたことは、うれしいし、無駄じゃなかったな」と感じている。

娘の葬式がきっかけで受洗

ある日、信者でもなく、それまで教会とは何の関係もなかった人が「娘が突然亡くなったので、教会で葬式を挙げてほしい」とやって来た。聞くと、「小さい頃娘が近くの教会で友達と遊ぶのが大好きで洗礼を望んでいたので、娘の葬式は教会ですることしか考えつかなかった。是非教会で挙げてほしい」という希望だった。Aさんは「どうしようかな、知っている人でもないし。でもこれを断ったら教会じゃない」と思って、主任司祭と相談して引き受けることにしたという。家族は殊ことのほか喜んでくれた。後にその家族は教会に通うようになった。父親は、その頃はまだ働いていたが、退職後に洗礼を受け、教会の壮年会の中心的存在として活躍するようになった。「あの娘の死がなかったら私は教会に来ていなかった」と話しているという。

本当の解決求め試行錯誤

こうした人たちとのかかわりの中で、Aさんは喜び・悲しみ・無力感などを感じながら、窓口としての役割を果たしているが、最初から今のように対応できたわけではない。さまざまな人たちとの出会いを通して、どう対応していけばよいのかを身につけて来たようだ。「最初の頃は、お金が欲しいという人に半分だまされていると思いながらも『かわいそうだな』、『あげないといけないかな』と迷った時もありました。しかしそれが本当の解決ではないということも分かって来ました」と当時をふり返る。

心の病を持つ人に「見えない壁」

Aさんは「葛藤かっとうとか限界を感じる時もある」という。心の病のある人が教会を訪ねて来たケースでは、なかなか受け入れが難しい時がある。本人の希望を聞いて講座のグループなどを紹介するが、往々にして怒鳴り散らすなどして講座の運営をめちゃくちゃにしてしまう。病院に行くことを勧めるが、こういった人は病院でも受け入れてもらえない現実もある。かといって教会でも難しい。このような時は、他の場所で個人的

に話したり、神父と話す機会を作ったりして、グループ活動に受け入れることは難しくても教会に来られる場所を確保する努力をしている。また、別のケースでは、悩みを持ったり生活の負い目を持ったり、居場所を求めて教会を訪ねて来るが、いつの間にか居なくなってしまう人も少なからずいるという。活動のグループに参加し少しずつうちとけて来ているように見えても、徐々に「やはり自分の居場所ではない」と感じて離れていく。教会は開かれた場を目指しているのだが、教会の活動グループには仲良しクラブ的な性格が結構あるのも現実だ。まわりも「どうぞ、どうぞ」と受け入れるが、その人たちにはどうしても居辛くなるような空気があるようで、いつの間にか居なくなってしまう。

本音と建前のはざままで

教会は福音をあかしする場であるべきだが、問題を持った人にはあまりかかわりたくないとか本音を漏らす人や、できればシャットアウトして自分たちだけの穏やかな雰囲気を守られたいとか、教会としての社会福祉活動の必要性は認めながらも、活動は教会の外でやってほしいと敬遠する人もいる。問題を抱えて、教会だったら何とかかなと思って訪ねて来ても、「教会に行ったがいやな顔をされた」「教会に通うようになったが居心地が悪かった」などといって教会を離れていく人も少なくない。Aさんは「そういった人たちが来られない教会って、一体何だろう。十分な使命が果たせていないのではないか」と考え込む。

門戸拡大へ中高年男性の出番

簡単には解決できない問題も多いが、まずは「いつ行っても誰もいない」とか「訪ねたけれど門前払いだった」とならないように、「人が来やすい教会」にしていく必要があるだろう。日本の教会では司祭の数の減少がさらに進みそうだが、そうした状況の中で教会に助けを求めて訪ねて来る人たちに対して、教会としての使命を果たしていくにはどのような取り組みが必要なのだろうか。司祭と協力しながら信徒が、教会を訪ねて来る人たちの窓口になる仕組みをつくって行かなければならない

時期に来ているようだ。そこで、豊富な社会経験を持った中高年男性信徒の出番である。定年退職で第一線から退いても、まだまだ体力も気力も充実していて、与えられた時間を使って教会活動に参加できる人もいる。こういった人たちが、自発的に教会の窓口機能を果たしていくこともできるのではないか。Aさんの話から、こんな可能性が見えてくる。



* さらに深めるために *

自分のつながりをふり返る

- 1) 「誰が来てもいいんだよ」を読んで、一番心にひびいたのはどこですか。そのひびきをしばらく味わってみましょう。
- 2) 今の教会は苦しんでいる人と、どのようにつながっているでしょうか。あるいは、つながっていないでしょうか。
- 3) つながっていくために、あなた自身がまず変わるべき点はどこでしょうか。さらに教会はどのように変わっていくべきでしょうか。

主日の福音ヨハネ 9 章 1 節-41 節を味わうために

「シロアムの池に行って目を洗いなさい」

この箇所は、生まれつきの盲人がイエスによって目が見えるようになり、ついには信仰の目も開かれて、イエスを主として礼拝するようになる話です。この人の信仰の成長とまわりの人の不信仰ぶりが対照的に描かれています。

教会に救いを求めてくる人びとを、この生まれつきの盲人と置き換えて読んでみましょう。物理的な救いと信仰の救いを両方体験していくプロセスに、教会（あなた）はどのような形でかかわることができるでしょうか。場合によっては、教会の人びとが信仰の成長を妨げているかもしれません。イエスと元盲人の姿を味わってみましょう。

路上死ゼロを目指して

人と人のつながりがホーム

千葉県市川市にある「市川ガンバの会」(注：43ページ)は路上死ゼロを目指すホームレス自立支援のNPO法人である。ガンバの会の夏祭りの準備で忙しい2007年8月初旬、事務所で居宅生活に移った人たちの交流場所となっているマンションの一室に私たちは副田一朗^{そえだいちろう}理事長(56歳)を訪ねた。

副田さんは体調を崩し、この5月、バプテスト教会の牧師を辞任した人であるが、背が高くがっしりとした体格、誰からも「兄貴」と慕われそうな気さくで頼りがいのある人と見受けられた。

おばちゃんのひとつが進路を変えた

「私が郷里福岡で学校中退、浪人を繰り返して自信をなくしていた20歳のある日、教会で私を見かねた一人のおばちゃんが『何してんのよ』と声をかけてくれたのです。その時、『ああ、このおばちゃんは私を気にかけてくれていたんだ』と感じ、だんだんと神の存在を深く感じるようになっていったのです」。それからは教会学校で子どもたちと接しながら、神の福音を伝えることを考えはじめ、当時目指していた道とは違い、牧師への招きに応えることになったという。

副田さんのホームレス支援のはじめは、北九州の教会の牧師をしていた時である。教会の周りには大勢のホームレスの人が住み、多くの人がそこで死んでいく姿を見た時、同じ人として生まれ、同じ人として命あるものがこの文明の社会にあって、路上で町の片隅で凍死していくことに大きな疑問を持ったことがきっかけとなっている。

その後、市川バプテスト教会へ赴任した。この教会では、説教の中で

時々ホームレス支援から学んだことを話していたが、信徒の間から出た「話だけでなく実践しなくていいのか」という声に促されて市川ガンバの会が生まれたという。副田さんは北九州での体験から、「やり始めたらやめることなく継続すること、教会の枠組みを越えて広く市民の協力を得て一緒にやること、そして市民の協力を得るということは、背後にあるキリストをストレートには前面に出さないことだ」と主張したそう。その考え方に対して、福音を宣^のべ伝えることを第一目的とすべきだ、と考えた信徒数人は教会を去ってしまった。副田さんは今も離れて行った信徒のことが心の傷として残っている。それでも「宗教は対等であるべきで、教えを受け入れたら恵んであげる、神を受け入れるから何かをするという考えは間違っている。キリストはそうはしなかった」ときっぱり。目の前の助けを求める人の必要に無条件で応えることが、主イエスの望みにも沿うことだとの気持ちが伝わってきた。

現在ホームレス支援を共にする仲間は、プロテスタントの信徒だけでなく、カトリックの信徒、近隣の人びと、一般市民を巻き込んで100人近くにのぼっている。宗教を前面に出さないことで、誰でもが参加しやすくなっているためだ。

支援者の活動は実に多岐にわたっている。週3回のおにぎり作りとそれに続くパトロール。パトロールでは各コースに分かれ食料、衣類、医薬品を持参し、一人ひとりの健康状態に気を配り、必要に応じて衣類や薬を手渡している。その一方、信頼関係が築けたら、路上生活から市川ガンバの会が管理している「自立支援住宅」への入居を促し、2,3カ月後に民間アパートに転宅できるよう社会生活に向けての生活指導もしている。しかし居宅生活に移っても、人と人とのつながりがなくて孤独になる人もいるため、人のつながりの回復のために年に数回、居宅者交流会を行い、年に1度の懇親旅行、ふるさと気分をみなで味わうために新年会、夏祭りも催している。しかし居宅者が増えることを喜びながらも、そのために一人ひとりに接する機会が少なくなっているのが現状で、もっと多くの支援者がほしいと痛感しているようだ。

私だって、一人の弱い人間なんだ、でも——

「実は今日、私の心の整理はついていないのです。怒り、腹立たしさ、いろんな思いが交錯しています。先ほど裁判所から帰ってきたばかりです。居宅生活者で私たちが支援していた知的障がい者Aが、車上荒らしの常習で逮捕され、今日裁判が結審したのです。懲役3年です。私はAが捕まった時ほっとした部分もあったのです。あまりにも今までAの生活の支援のために時間をとられていたからです。でもそのAが最後に裁判官に『刑を終えたら副田さんの所に帰ります』と言ったのです。私は聞いてないよ。私は物でもロボットでもない、一人の弱い人間だよ。もう疲れたよ。でもキリストは受け入れるんでしょうねえ。しかし、そう話す副田さんの顔にはすでに受け入れる決心が感じられた。

夜間救急車で運ばれる路上生活者には付き添い人がいなければ診療拒否があるそうだ。路上で暮らす人には、夜中になると病気になる人が多いという。救急隊からの夜中の呼び出しで睡眠時間3時間の日が続くこともあるという副田さん。その日々には想像以上の苦労があるのだろう。

どんな人でも神の目からは尊厳ある実り

副田さんのホームレス支援の原点は「刈り入れは多いが、働く人は少ない」（マタイ9・37）というキリストの言葉にある。「キリストは、路上の人も神の目には一人のいのちある人間、一人の尊厳ある実り、収穫であるといわれたのです。私が影響を受けた『死を待つ人の家』を主宰したマザー・テレサの『もっと治る見込みのある人にお金を使えばいいと思うが?』と質問した日本人への『生きることは尊いが、よく死ぬことも尊い』という答えと通じると思います。マザーは、私たちが陥りやすい効率主義・有効主義をきっぱりと否定したのです。全ての人は神にとってかけがえのない存在で、愛し愛されるために創造されたのだという一点に立っています。そして私も、かけがえのない一人の存在として神の目に見られているのがうれしいのです」。

副田さんもこれまでに多くの人の死を看取っている。そして「残念な

がらまだ実現しませんが、私は路上死ゼロを目指しています。路上は人間の死ぬ場所ではありません。私も、人間として生きることは尊いのですが、死ぬことも尊いと思っています」という。ある人は死ぬ時、副田さんに向かって「ここは路上ではないよね、ベッドの上だよ、副田さんありがとう」といって息を引き取ったそうだ。ガンバの会では葬儀を大切にしている。それは「俺は犬や猫ではない、自分が生きていたということ覚えていて欲しい」という言葉を聞いた時、これこそすべての人の心からの叫びであり、何としても大切にしなければいけないことだ、と感じたからだ。「彼らは死んでしまえば誰からも忘れ去られてしまう、そんな存在として自分のことを見ているのです。それは彼らにとってとても寂しいことです。ですからガンバの会では新年会と夏祭りには、亡くなった方の名を読み上げて追悼します。それで今生きている彼らも、これで自分も安心だという言葉をお口にします」。

一人ぼっちじゃないよ

ガンバの会の支援の目的は人間としてかわりをもつことにある。夜間パトロールもおにぎり配りも全て、かわりによって信頼関係を築き、まず路上から寒さをしのげる居宅生活へ、そしてその家が彼のホームになることを願ってのものだ。

「私は居宅生活者を訪問すると、必ず部屋に上がらせてもらいます。いつまで経っても部屋に生活用品が増えない人は、また路上に帰る可能性が高いように思います。自分で選んだ物が部屋に並んでくるとだんだんに自分の城が築かれ、その部屋がホームになっていくのです」。

世間で一番楽しい盆と正月は、故郷を失った路上生活者には一番苦しい時期である。収入源となる古雑誌も出回らないし、コンビニの売れ残りの弁当もない。クリスマスと共にした人が年末に自殺していたということもあった。ガンバの会の新年会、夏祭り、年に1度の懇親旅行は、ひたすら人としてのかかわりを持つことで、自分は一人ぼっちではないということを実感し、生きる喜びを見出して欲しいからだ。

「路上の時は人のことを気遣う余裕がなかった彼らの中には、『居宅』

して人を気遣えるようになる人がいます。それまで、人を悪く言ったりすることで、自分のプライドを保ちながら生きていた彼らが、人を支える喜びに生きるようになるのです」。近頃の夜間パトロールは支援者よりも居宅者の参加の方が多くなっているようだ。

「現在、路上生活者は減る傾向にあります。でも若いネットカフェ難民、独居老人、いじめによる引きこもりの子どもたち、彼らも広い意味ではホームレスでしょう。ハウスはあっても自分のホームがないのです。こういう人はこれからもっと増えるかもしれませんね」。

ガンバの会には、近頃は路上生活者だけでなく、ネットカフェ難民や独居の高齢者などからも相談が持ち込まれている。

自分は一人でやっているのではなく、多くの仲間がいるという支え、長いかかりから生まれた信頼関係で、路上から居宅生活に移る人が増え、ホームを築く人が増えていること、そして何よりもキリストのみ言葉に支えられて、副田さんの日々があることを実感したインタビューであった。

* さらに深めるために *

自分のつながりをふり返る

- 1) 「路上死ゼロを目指して」を読んで、一番心にひびいたのはどこですか。そのひびきをしばらく味わってみましょう。
- 2) 神の目には、路上の人も、一人の尊厳ある実りです。その神の目で自分を見つめてみましょう。まわりの苦しんでいる人を見つめてみましょう。何を感じるでしょうか。
- 3) 人と人のつながりから生まれるのが人間の真の「ホーム」。あなたのホームはどこにありますか。苦しんでいる人とのつながりから、どのようなホームが生まれてくるでしょうか。

主日の福音ヨハネ11章1節-45節を味わうために

「イエスは『ラザロ、出て来なさい』と大声で叫ばれた」

この話は死んでしまったラザロをイエスが蘇よみがえらせる出来事です。イエスはラザロの死に涙を流し、心に憤りを覚えられ、死の淵ふちから救い出されます。

苦しみや悩みで死の淵まで追いやられている人（例えば、ホームレスの人）に対して、出て来なさいと大声で叫ばれるイエスの心は、どのようなものだったのでしょうか。死の世界に閉じ込められている小さい人びとに対するイエスの叫び声を味わってみましょう。

私たちが忘れないで

難民生み出す国家のエゴ



1994年4月6日。人類史上、未曾有の悲劇は、放たれた1発の小型ミサイルが引き金となって、あたかも濁流を押しとどめていたダムが決壊するかのようになり、一気に始まった。その日、アフリカの中央にある小国ルワンダは、虐殺の現場となった。激しい濁流は、首都キガリで新しい政権が誕生する7月まで、誰もそれ

を止めるすべを知らなかった。それどころか、なぜ殺すのか、何のために殺すのか、誰が命じているのか、それすらも判然としないまま、何ものにかに突き動かされるように、多くの市民がナタを手にとり、棍棒^{こんぼう}を握りしめ、隣人を、家族を、友人を殺していった。民族が違うという理由だけで。

ザイール人司祭の人生を変えた「あの日」

ローマにあるバチカンの「領土」の一つ、トラステヴェレにあるサンカリスト宮殿の1階、ずば抜けて天井が高い一室で、ピエール・チバンボ神父は現在、国際カリタス本部のアフリカ地域における活動を統括するセクションの責任者を務めている。チバンボ神父は、ルワンダの隣国、コンゴ民主共和国（旧ザイール）出身の教区司祭だ。彼の所属している教区は、ブカブ大司教区という。

「あの日から始まった混乱は、世界が注目しなくなっても続いていたんです。私は、その混乱の中で、(自分の)教区の大司教を失い、親戚の多くを失い、友人を失いました」。

「あの日」、すなわち94年4月6日、チバンボ神父はブカブ教区のカリ

タス責任者だった。ブカブは国境の町だ。ルワンダとザイールを隔てているキブ湖の南端に位置し、隣はルワンダのシャンググという町。ブカブ教区のカテドラルからは、シャンググ教区のカテドラルが見えるほど、寄り添うようにして二つの町は湖畔に広がっている。

「あの日」、チバンボ神父たちは隣国の異変にすぐ気がついた。立ち上る黒煙、緊迫した空気、騒然とする人びと。しばらくすると、虐殺から逃れたツチ族の人びとが国境を越えてブカブの町に押し寄せてきた。チバンボ神父はカリタスブカブの関係者を総動員して対応にあたった。

「もちろんそれまでもカリタスは社会的な弱者を助けるための活動をしていました。貧困撲滅のため、村落共同体開発にも取り組んでいました。でもあの日から、すべては一変しました」。

押し寄せる難民

しかしその時ブカブに押し寄せた3000人ほどのツチ難民は、悲劇のほんの始まりにすぎなかった。3カ月後、ルワンダで続いていたフツ族中心の民族主義的政権と、ウガンダから攻め入っていたツチ族中心のルワンダ解放戦線（RPF）との内戦は、一気に形勢が逆転する。ルワンダ解放戦線が首都キガリの攻略に成功し、90年10月から続いていた内戦に終止符を打つ形で、新しい政府を樹立したのだ。これによって恐れをなしたのは、4月からの虐殺を推し進めていたフツ族中心の政権だ。報復から身を守るためには、何かを盾にして逃げるしか道はない。盾にされたのはフツ族の一般民衆だった。

敗走を続ける当時の政府軍に追い立てられるようにして、フツ族の人たちが隣国ザイールに押し寄せた。ブカブにも30万人以上の難民がやってきた。国連難民高等弁務官のブカブ事務所前の路上には、助けを求め人びとが順番を待って、何日も野宿を続けたという。

「ブカブとその周辺には人があふれていました。年寄りや病人も大勢いました。私にとってはその中に多くの子供たちがいることが心配の種でしたし、しかも親とはぐれてしまった子供たちも多くいたのです。そして、路上に倒れ込んだ人やそのまま亡くなってしまった人の何と多か

ったこと。悲しい光景でした」。

どういう訳なのか、国際社会は当初、虐殺を無視しようとしていた。国連も動かなかった。マスメディアの反応も鈍かった。そのため、カリタスの対応にも資金的な限界があったとチバンボ神父は話す。

「それでもカリタスの強味は、草の根レベルでどこにでも存在していることです。後に難民発生がマスメディアによって国際的に取り上げられたことで、欧米の救援団体がゴマに押し寄せたのですが、到着した救援団体の連中は、カリタスがすでに活動していることに驚いていました。私たちの人数や資金は限られていたのですが、このときほど、カリタスの底力を感じたことはありません。ネットワークの強味です」。

難民が波のように押し寄せる光景を目の当たりにしたとき、何かをしなければという思いはあったものの、それまでの教区カリタスが手掛けたことのないような大規模な活動を統括する立場に立たされたチバンボ神父は、当惑したという。^{ほうぜん}何かから手をつければよいのか、何を提供すればよいのか。しかし呆然としているわけにもいかない。とりわけ、国境地帯で目の当たりにした難民の波の中で取り残され、行く当てもなく不安のうちにさまよう子どもたちの姿を思い浮かべたとき、チバンボ神父は自分自身を奮い立たせて、寝る間も惜しんで走り回った。そんなチバンボ神父を助けたのは、国際カリタスのネットワークだった。早速現地に飛んだ国際カリタスが、各地の難民キャンプ運営に直接当たることになった。チバンボ神父もカリタスブカブが担当する8カ所のキャンプで、食糧供給や水の手配、医薬品の確保などに奔走することになる。

カリタスジャパンも国際カリタスの要請に応え、94年末から95年5月まで、ブカブ郊外の村で難民キャンプ運営に取り組んだ。カリタスジャパンにとって初めての経験でもあり、活動がスムーズに進んだわけではなかった。活動の調整のために、当時2カ月ほど現地に滞在した菊地功司教（新潟教区）は、チバンボ神父と毎日のように話し合った。菊地司教は当時を思い出してこう言う。「1度だけ、チバンボ神父がカリタスジャパンをほめてくれたことがあるんです。大国のカリタスのように、頭ごなしに命令してこないところがすばらしいと」。大国のカリタス

は、ともすると現地責任者のチバンボ神父にあれこれと指図をしてることが多かったという。目の前の救いを求める人びとへの対応に奔走していたチバンボ神父は、そういった大国カリタスとの関係に、さらに神経をすり減らしていたのかもしれない。

難民を忘れていく国際世論の非情

「ルワンダ難民は、(96年で終わったのではなく) 1994年7月から99年末まで、コンゴ東部にいたんですよ」。

1996年10月以降のことを尋ねると、チバンボ神父はこう力説した。実はこの月にザイルでは内戦が勃発^{ほっばつ}していた。それに伴って難民キャンプは解消され、難民はルワンダへ帰還したと理解されているのだ。

「難民たちはコンゴの内戦が始まると難民キャンプを追われて、キサンガニ方面へとジャングルの中をさまよい始めたのです。カリタスはその現場にもいました。ある国際機関が(難民がさまよい始めたことで)コンゴにはもう難民はいないなどと恥ずかしげもなく世界に向けて宣言していたその時に、カリタスは命を救うために活動していたんです。難民たちは国際政治の犠牲者でもあるんです」。

今でも不安定な社会状況が続いているコンゴの内戦には、ウガンダ、ルワンダ、アンゴラなどの国が深くかかわっている。もちろんその背後には、さらに強大なアフリカ以外の国々の影も見えてくる。諸国家をそれほどまでにして戦いへと駆り立てるのは、コンゴ東部の地下に眠る種々の鉱物資源の存在だ。人間の欲望は、何十万人もの人間の命を簡単に犠牲にしてしまう。人間の欲望の結果である戦いは、その現場に居合わせた人間の心に、深い傷だったり、悲しみだったり、落胆だったり、さまざまな感情の痕跡を残していく。しかし心を持たない国家は、感情的に傷つくことがない。だから平気で命を奪っていくのだ。

ルワンダの虐殺も、単純に民族対立と理解してはならない。背景には、植民地支配時代から独立後に至るまで、長年にわたって支配者が造り出した「人工的」な対立感情が存在しているからだ。分裂し対立している人びとは、甘い言葉で安全を提供してくれる支配者に従順に従う。

多くの人びとはなぜ憎み合うのか理由も分からないまま、虐殺に手を染めた。

ザイルで内戦が始まる直前の96年の8月、難民キャンプを訪れた菊地司教に、ある難民リーダーがこう語りかけた。

「日本に戻ったら、私たちがまだいることを伝えて欲しい。私たちは忘れられてしまったのだ」。

国際世論は、打ち上げ花火を見るように一時的には熱狂するが、あっという間に興味を失ってしまう。その陰で、忘れ去られたまま苦しみのうちに取り残される多くの人たちが存在する。国際世論は非情だ。そしてその非情な世論を作り上げているのは、私たち一人ひとりであることを忘れてはならない。

癒えることのない紛争の傷跡

チバンボ神父は当時をふり返ってこう言う。

「世界中の多くの人たちが連帯を示してくれたのですが、難民のすべての必要を満たすことは容易ではありませんでした。それ以上に、難民を受け入れている地元の村人を私たちは支えることができなかつた。あるところでは、難民よりも地元の村人の方が貧しいことだってあったのです。私たちはできる限り効率的に難民救援にあたつたのですが、問題の根源に取り組むことができなかつた。・・・内戦は数多くの人の命を奪つたんです。このことが本当に私の心の大きな痛みとして残っています。司祭として私は、ルワンダという国を未だに理解することができません。キリスト教の国なんですよ。そのキリスト教国があのような悲劇を生み出すとは。虐殺後の社会を立て直すには、努力が必要です。(ルワンダ国内で)最大の民間組織である教会がそれに力を貸さない限り、実現はしません。幸いなことに、根本原因に取り組もうとする動きもあります。例えばシャンググ教区では、虐殺された信徒たちの妻が、虐殺犯として刑務所に入っている人たちの夫人を助ける仕事をしているのです。カリタスと教会は、ルワンダの対立の傷を癒やす和解のために、さらに力を入れなくてはならないと確信しているのです」。

* さらに深めるために *

自分のつながりをふり返る

- 1) 「私たちが忘れないで」を読んで、どこが心に一番ひびいたでしょうか。そのひびきをしばらく味わってみましょう。
- 2) この世界全体に働いている巨悪の力に、心を向けてみましょう。世界に覆いかぶさっている社会の構造的な悪の力と、それに苦しめられている大多数の貧しい人びとの存在。その大きな痛みを味わってみましょう。
- 3) 神さまはこの世界の苦しみを、どのように受けとめておられるでしょうか。そして、今、あなたにできる小さな一歩は何でしょうか。

主日の福音マタイ27章11節-54節を味わうために

「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」

イエスの受難物語には、イエスの苦しみと人間の罪が、イヤというほどはっきりと描かれています。この受難物語を、全世界で苦しんでいる人びとの苦しみに合わせて、心で受けとめてみましょう。

例えば、「十字架につけろ」と叫ぶ群衆の声は、100日間で80万～100万人が犠牲になったルワンダの虐殺の声とひびき合います。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」というイエスの叫びは、全世界で苦しみのうちに死んでいく人びとの叫びとつながっているとも言えるでしょう。

ひびきをつなぐとき

この冊子とともに、四旬節を過ごされた皆さま、いかがだったでしょうか。レポートの6人の方々日々の生活で悩み苦しむ私たちと同じキリスト者です。彼らが苦しみを背負っている人びとと真剣につながる中で、涙し、落胆しながらも、力づけられ、慰めを受けて歩んでおられるのが少しは感じとれたのではないのでしょうか。

マタイ25章31節から46節の最後の審判の話を変えて読んでみましょう。最も小さい者の1人につながった人は、知らず知らずのうちに主イエスにつながっていきます。そして、主イエスとつながることによって、神の国へとつながります。神の国につながるとはどういうことでしょうか。それはまさにここに登場した6人の方々が経験されたことではないのでしょうか。例えば、自分の苦しみから人の苦しみに共感すること、小さい人びとの姿から自分の生き方を見つめ直すこと。小さい人びとを1人の尊厳ある人格として、ともに歩むこと。彼らの変わっていく姿に主キリストの姿を見いだしていくこと。自分の弱さや限界にも直面し、そこからまた主にゆだねて新たに歩み始めること。これらすべてのつながりから、神の国が生み出されていくのでしょうか。

私たちが打ちひしがれた人びととつながっていく中で、主イエスの受難をともし、さらに主キリストの復活の喜びをも味わっていきたいと思います。

なお、この冊子を読んだご感想やご意見を下記の係あてにお寄せください。

皆さまの信仰生活が神に祝福され、神の国の喜びに導かれていくよう祈っております。

〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館
カリタスジャパン『つなぐ2008』係
Tel: 03-5632-4439 Fax: 03-5632-4464 e-mail: info@caritas.jp
<http://www.caritas.jp>

注記

「苦しみからほほ笑みへ」(16ページ)

「組」：キリシタン時代に全国に広がっていた信徒の組織。「ミゼリコルディアの組」は「慈悲の組」とも言われ、ドチリナ（公教要理）に示された慈愛の所作を実行するために活発な活動をしていた。慈愛の所作には「色身（肉体）にあたる七つの事」として、「飢えたる者に食を与ゆる事、渴したる者に物を飲まする事、肌を隠しかぬる者に衣るいを与ゆる事、病人を労わり見舞う事、行脚の者に宿を貸す事、囚われの身を受くる事、死骸^{しがい}を取むる事」が記されている。この冊子のテーマとしたマタイ25章にも通じている。「サンタマリアの組」は、聖母マリアの生き方を模範とした、信徒養成と福音宣教のための共同体で、禁教の時代には信仰を伝承する大きな役割を果たした。他に「ご聖体の組」などがある。

「誰が来てもいいんだよ」(25ページ)

AAグループ：Alcoholics Anonymous（アルコホリック・アノニマス）の頭文字。アルコール依存症の当事者が、匿名性をもって集まり回復に向けた取り組みを行う自助グループ。

マックの施設：Maryknoll Alcoholic Center（メリノール・アルコホリック・センター）の頭文字。アルコール依存症患者のための回復支援センター。最初メリノール宣教会が立ち上げて広まった。

その他、薬物依存症からの回復のための施設としてダルクもある。

関連サイト：JCCA（日本カトリック依存症者のための会）

<http://www.jcca.client.jp/>

「路上死ゼロを目指して」(30ページ)

市川ガンバの会：連絡先 TEL・FAX 047-335-7815

ichikawa-gamba@abelia.ocn.ne.jp

<http://members.ld.infoseek.co.jp/ichikawaganba>

お知らせ

〈日本カトリック司教協議会の社会系委員会発行物のご案内〉

社会司教委員会

『信教の自由と政教分離』 定価600円＋税 中央協議会出版部 発行 2007.3.26

2007年2月に発表した司教団メッセージ「信教の自由と政教分離」とメッセージの理解の助けとなる4人の司教の論考を収録し、あらたにカトリック中央協議会より発行しました。

論考は、「自民党新憲法草案を検証する」谷大二司教（さいたま教区長）、「『国是』と迫害歴史上よりの考察」溝部脩司教（高松教区長）、「戦前・戦中と戦後のカトリック教会の立場」岡田武夫大司教（東京教区長）、「信教の自由と国家」高見三明大司教（長崎教区長）の四つです。

憲法20条の改正問題は、私たちカトリック教会にも大きな関わりがあります。過去にカトリック教会が味わった苦しみを再び繰り返してはならないとの司教団の強い思いが詰まった一冊です。

『「時のしるし」を読み解き、宗教の役割を考える
—司教のための社会問題研修会講演録—』 発行 2007.5.21

社会司教委員会が毎年企画している社会問題研修会の2004年と2005年の講演記録を収めたものです。

「キリスト教は、いまの時代状況にいかに向き合うのか？」高橋哲哉氏（東京大学大学院・教授）、「現状分析を通してみる『時のしるし』」斎藤貴男氏（フリージャーナリスト）、「憲法九条と安全保障のジレンマ」M.シーゲル師（南山大学社会倫理研究所）を収録。

それぞれの講演テーマは興味深いもので、「今」を読み解くのにヒントになる内容の小冊子です。非売品のためカンパを頂ければ幸いです。申し込みは、カトリック中央協議会社会福音化推進部まで。

日本カトリック部落問題委員会

人権教育資料No.12「出会いが人間をかえ感動は人を動かす」—司祭研修10年の学び—
B6判114頁 頒布価格500円 発行 2007.3.1

著者 日本カトリック部落問題委員会、編集 カトリック大阪教会管区部落問題活動センター
この冊子は、1995年から2004年まで大阪大司教区で行われた「月例司祭研修会・部落問題10カ年プラン」をまとめました。

要望書 「星塚敬愛園における『標本』とされた胎児の火葬問題についての緊急要望書」
発行 2007.2.13

ハンセン病国立療養所星塚敬愛園に安置されている「胎児標本」について、遺族の意志と意向に沿って「火葬」、埋葬、供養を行うこと、また「胎児標本」問題の真相究明と責任の明確化を、厚生労働省と星塚敬愛園に対して要請しました。

日本カトリック正義と平和協議会編

声明文 死刑執行に強く抗議し、死刑制度廃止に向けた取り組みを求めます
発行 2007.9.4

2007年8月23日、東京拘置所および名古屋拘置所に収監されていた、竹澤一二三さん、瀬川光三さん、岩本義雄さんの死刑囚3名に死刑が執行されました。長勢甚遠・元法務大臣が、2006年12月に4名、翌年4月に3名、今回の3名を加えて在任中10名の死刑を執行

したことに抗議しました。

講演録 「福音と平和憲法」—今、選択のときキリスト者として私たちに問われているもの— 発行 2007.9.20

「ピース9の会」2007年2月18日町田教会信徒ホールでの松浦悟郎司教講演録

日本カトリック難民移住移動者委員会

「5つのパンと2ひきの魚—獄中からの祈り」フランシスコ グェン・ヴァン・トゥアン著 日本カトリック難民移住移動者委員会訳 定価1,300円+税
女子パウロ会発行 2007.4.15

「本書はカーディナル・トゥアンが投獄されていたときの祈りのメモをもとにして書かれた霊的読書であり、彼の祈りであります。その祈りには現実味があり、迫力があり、強さがあります。それはキリストにおける希望に裏打ちされているからなのです。」(さいたま教区司教 谷 大二 推薦の言葉より)

購入ご希望の方は女子パウロ会通信販売部 TEL: 03-3479-3552 FAX: 03-3479-5198まで。

〈カリタスジャパン発行物のご案内〉

声明書 全ての人が安心して暮らせる社会に向けて
—障害者自立支援法施行後の現状をかえりみて— 発行 2007.1.19

日本の社会福祉政策に対する声明を作成、政府を始め、広く関係諸機関に発信しました。

「カリタスジャパンと世界」—武力無き国際ネットワーク構築のために—
カリタスジャパン担当司教 菊地 功著
サンパウロ刊 B 6判280頁 定価1,000円+税 発行 2005.8.15

西アフリカのガーナで8年間“貧困のアフリカと国際援助の縮図”のなかで生活した筆者が、カリタスジャパンの活動から見てきた世界の有様と援助に関わる必要な知識と心構えを解説しています。

ご購入ご希望の方は、サンパウロ (FAX: 03-3351-9534) まで。

カリタスジャパンHIV/AIDSデスク資料No.1 「HIV/AIDSと性教育」
発行日 2005.7.31

カリタスジャパンのHIV/AIDSデスクでは、デスクとしての使命であるHIV/AIDS啓発活動の一環として実施した講演会に関して、資料集のご要望が多かったことからこれを発行しました。

メッセージ「世界エイズデー 若者へのメッセージ」 A 4判1枚 発行日 2007.12.1

日本の若者にHIV/AIDSへの関心を高めてもらうように、新しいメッセージを発表しました。

「叫び 合本：1997～2002」（四句節キャンペーン小冊子）
A 5判222頁 頒布価格400円（作成経費、郵送費込み） 発行 2003.1.12

前シリーズ『ひびき』の前のシリーズ『叫び』を創刊号から6年分まとめました。

『ひびき』のバックナンバーご希望の方は事務局にお申し込みください。
郵送致します。

2008年四旬節キャンペーン資料の問い合わせ先一覧

2008年四旬節キャンペーン資料として例年のように、四旬節キャンペーンの小冊子『つなぐ2008』、ポスター、四旬節献金趣意書、献金箱、献金袋を用意いたしました。各小教区には「灰の水曜日」前後に届くよう手配しておりますが、追加要求等につきましては下記の各々所属教区宛にお問い合わせください。

なお、『つなぐ2008』には点訳本、録音テープが用意されております。

札幌教区 〒060-0031
札幌市中央区北一条東6丁目10
札幌教区本部事務局
Tel: 011-241-2785
Fax: 011-221-3668
e-mail: dio-office@csd.or.jp

仙台教区 〒980-0014
仙台市青葉区本町1-2-12
仙台教区本部事務局
Tel: 022-222-7371
Fax: 022-222-7378
e-mail: kyoku-office@sendai.catholic.jp

新潟教区 〒951-8106
新潟市中央区東大畑通一番町656
新潟教区本部事務局
Tel: 025-222-7457
Fax: 025-222-7467
e-mail: nig-cur@ecatv.home.ne.jp

さいたま教区 〒330-0061
さいたま市浦和区常盤6-4-12
さいたま教区本部事務局内
カリタスさいたま
Tel: 048-831-3150
Fax: 048-824-3532
e-mail: saitama-kyoku@mbm.nifty.com

東京教区 〒112-0014
東京都文京区関口3-16-15
東京教区本部事務局
Tel: 03-3943-2301
Fax: 03-3944-8511
e-mail: info@tokyo.catholic.jp

横浜教区 〒211-0064
川崎市中原区今井南町500
カトリック中原教会
横浜教区福祉委員会
Tel: 044-722-6060
Fax: 044-733-9311
e-mail: fukushi@japan.interq.or.jp

名古屋教区 〒466-0037
名古屋市昭和区恵方町2-15
名古屋教区社会福祉委員会
Tel: 052-852-1426
Fax: 052-852-1422

京都教区	〒604-8006 京都市中京区河原町通三条上ル 京都教区本部事務局	Tel: 075-211-3025 Fax: 075-211-3041 e-mail: cathonbu@mbox.kyoto-inet.or.jp
大阪教区	〒540-0004 大阪市中央区玉造2-24-22 大阪教区本部事務局	Tel: 06-6941-9700 Fax: 06-6946-1345 e-mail: auxbpsec@osaka.catholic.jp
広島教区	〒730-0016 広島市中区鞆町4-42 広島カトリック会館 広島教区本部事務局	Tel: 082-221-6017 Fax: 082-221-6019 e-mail: tob7105@mocha.con.ne.jp
高松教区	〒760-0074 高松市桜町1-8-9 高松教区本部事務局	Tel: 087-831-6659 Fax: 087-833-1484
福岡教区	〒810-0028 福岡市中央区浄水通39 福岡教区本部事務局	Tel: 092-522-5139 Fax: 092-523-2152
長崎教区	〒851-0301 長崎市深堀町5-292 カトリック深堀教会	Tel: 095-871-3459 Fax: 095-871-3464 e-mail: mituyo@ngs2.cncm.ne.jp
大分教区	〒870-0035 大分市中央町3-7-30 大分教区本部事務局	Tel: 097-532-3397 Fax: 097-538-6287 e-mail: cat-oita@oct-net.ne.jp
鹿児島教区	〒892-0841 鹿児島市照国町13-42 鹿児島教区本部事務局	Tel: 099-226-5100 Fax: 099-225-0440 e-mail: kagoxavi@poem.con.ne.jp
那覇教区	〒902-0067 那覇市安里3-7-2 那覇教区本部事務局	Tel: 098-863-2020 Fax: 098-863-8474 e-mail: BishopNaha@aol.com

この冊子の編集にあたり、下記の点に留意しておりますが、お気づきの点を、ご指摘、ご教示いただけましたら幸いです。

- (1) 面談者のプライバシーに差し障る関係者、場所、その他の名称、氏名、住所、固有名詞等については、本人の承諾をいただいた方以外は、すべて仮名とさせていただきます。
- (2) 差別語、不快用語につきましては、厳正な検討を加えて注意をしましたが、面談者が話しことばで使われている用語、用法はそのまま使用している場合もあります。

事前に当協議会事務局に連絡することを条件に、通常の印刷物を読めない、視覚障がい者その他の人のために、録音又は拡大による複製を許諾する。ただし、営利を目的とするものは除く。なお点字による複製は著作権法第37条第1項によりいっさい自由である。

四旬節キャンペーン小冊子 No.22 2008年

「つなぐ 2008」

2008年2月6日 発行

編集 日本カトリック司教協議会

カリタスジャパン

発行 カトリック中央協議会

〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10

日本カトリック会館内 電話 03-5632-4411

カリタスジャパン 電話 03-5632-4439 (直通)

印刷 精興社
